

「では私の気の済むようにさせてもらおう」

ヤマトがこちらに歩み寄ってくる。左手で右手の拳を撫でる仕草にヒビキは思わず息を呑んだ。

もう後一步の距離まで来たところでヒビキは覚悟を決めて目を閉じる。

自分が全力で殴ってもヤマトは倒れこまずに踏みどどまった。おそらく見た目よりも力は強いのだろう。殴られるなんて小さい子供の頃以来で、覚悟はしていても身体が竦む。

胸倉を引き寄せられた。

口元に何かぶつかると。そのまま、痛みや衝撃はやってこない。

「きよきよ、局長！」

「あらまあ！」

マコトの慌てた声にオトメの暢気な声が被さる。

押しあてられたままの何かが唇越しに体温を伝えてきたが、すぐにそれは離れて、

「ふん、つまらん」

低く掠れた声でヒビキはようやく何が起こったのか気がついた。

「な……なっ、なにするんだっ！」

ごしごしと拭った唇から頬へ熱が広がって、擦っても

擦っても引かない気がした。周りの視線がいたたまれないとヒビキは思ったが、角度と立ち位置の関係からその瞬間を見ていたのはマコトとオトメだけだった。

（だいたいそっちから勝手にしたくせにつまらないだつて？）

睨みつけるとヤマトは微かに笑みを浮かべる。

「お前がはじめをつけると言ったのだろう。私は満足した。何か不満か？」

「つまらないって言ったくせに」

小声で呟いたが、聞こえていたようですますます笑みが深くなる。

「ハハハッ。つまらなかったが、お前の面白い顔が見られたから許してやろう」

（この人……また、殴ってやりたいんだけど）

もちろん冷静な状態のヒビキは、そんな事をしてさらにこの場の注目を集めるような真似はしない。

良いように考えればこれはヤマトなりの和解の印だろう。こんな手段ではじめをつけてもヒビキの気は晴れないが、あえてそうしたのは殴られた腹いせというところか。

マコトとオトメの反応から、彼のこの行動は普段側にいる者から見ても意外だったと察せられた。